



GOOD NEWS ときのことえ



「あなたは、わたしの内臓を造り、母の胎内にわたしを組み立ててくださった。わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っています。秘められたところでわたしは造られ、深い地の底で織りなされた。あ

なたは、わたしの骨も隠されてはいない。胎児であったわたしをあなたの目は見えておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。まだその一日も造られないから。」(詩編139編13-16節)

神は、あなたと、まだ生まれていないすべての子ども一命一命のための特別な計画と目的をもっておられるのです。(救世軍士官(伝道者))

Photo on VisualHunt

War Cry

10月号

福音版
2019
October
No.2790

二〇一九年 十月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行

広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

創立者 ウィリアム・ブース

大将 ブライアン・ペドル(万国本営 英国ロンドン)

日本司令官

ケネス・メイナード(救世軍本営 東京都千代田区)

http://www.salvationarmy.or.jp



世界をみつめて

〈米国〉人身取引被害者支援啓蒙イベントで、山室軍平の映画が上演される
世界中で人身取引の犠牲となっている人が、およそ2,100万人いると推計されています。救世軍では世界各地で人身取引の予防、啓蒙、救出、生活支援の活動をおこなっています。

2019年6月7日(金)、米国サンディエゴで、その地域における人身取引被害者への支援活動を紹介するイベントが開催されました。

席上、ケニアで人身取引の被害に遭い、結果、サウジアラビアと米国で働かされていた女性が証しました。仲介業者に騙され、雇用契約の内容も知らないままであったこと、目に見える鎖ではなく、精神的な鎖でしばられ、生活のすべてが管理され、休む間もなく働かされていたこと、自力で逃げ、救世軍に救出されたこと、救世軍の支援を受け、看護師の資格を取って働いていることなど、快活に語りました。

イベントでは、人身取引被害者を保護する関連施設だけでなく、小隊(教会にあたる)でも人身取引について学ぶ必要性が強調されました。また、手作りお菓子をもった救世軍のメンバーが、性的労働に従事している女性を定期的に訪問して会話をしながら、救出に結

すべての命を知っておられる神

シエリル・メイナード

人工妊娠中絶の話題は、多くの議論や論争、感情を呼び起こすことでしよう。そして、議論の中で多くの人が、「それは、命の始まりをいつの時点とするのですか?」や、「命はどのように始まるのですか?」という疑問を投げかけます。救世軍は、次のように考えています。

人が神の姿に似せて造られたこと、それゆえにすべての人には固有の、ユニークな価値があることを信じます。人の命は聖なるものであり、すべての人は、尊厳と敬意をもって取り扱われるべきです。救世軍は、母の胎における懐妊によって、その人の人生が始まることを受け入れます。私た

ちは、社会が、他者に対する思いやりをもつ責任があると信じます。特に、胎児を含む弱者の福祉、安寧を図る責任があると信じます。『救世軍見解表明「社会道徳に対する救世軍の立場「人工妊娠中絶」より』

命はかけがえないものです。命を与えてくださる神に敬意を表すように、命に対する敬意をもたなければなりません。聖書に「神はすべてを知っておられる方」であるということ。神は一人ひとり、そのそれぞれの命を、胎内に形づくられる前の命でさえもご存じなのです。

救世軍は、妊娠において難しい決断をしなければならぬような、非常に悲しい、苦悶する状況があることを理解しています。たとえば、妊娠が母体の命への深刻な影響がある場合、または胎児に深刻な異常があり、生存の可能性が低い、もしくは、暴力的状況下での妊娠の場合、これらの場合、妊娠中絶の正当性を認める可能性があります。

歴史的にみても、あらゆる地域・文化の中で人工妊娠中絶がなされてきました。そして近年、医学の進歩と社会的規範の変化により、人工妊娠中絶は多くの人のために、より選びやすい選択肢として受け入れられています。

けれども人工妊娠中絶を一つの選択肢とする前には、慎重な検討が必要です。自分たちにとって都合の悪いタイミングだから、養育できそうにないから、または、受け入れがたい妊娠であるから等の理由で人工妊娠中絶を選ぶことは、一つの命を奪うことと同等であることを熟考すべきです。一度の「都合の良い」選択が、生涯にわたる羞恥心と罪悪感、後悔をもたらすこともあるのです。

私たちの希望と信仰は、すべてのことを知っておられる神にあります。神は、まだ生まれていない人の、そのすべての命を知っておられます。

神はまた、人工妊娠中絶を選んだことの影響から生じる心身の痛みと苦しみ、後悔と羞恥心を知っています。

たとえ、人工妊娠中絶が市民権を得たような時代にあっても、人工妊娠中絶を考える上で、そのすべての命の一つひとつが貴重であることを覚えるなら、人工妊娠中絶が、決して安易な方法ではないことを理解するでしょう。

神は、あなたと、まだ生まれていないすべての子ども一命一命のための特別な計画と目的をもっておられるのです。(救世軍士官(伝道者))



び付けている活動も紹介されました。

最後に、日本での人身取引被害者支援活動の歴史的記録として、映画『地の塩 山室軍平』が上映され、東條政利監督がインターネットを通して映画の紹介をしました。

※日本の救世軍でも、10月27日(日)に、八幡小隊(午後1時半~)で同映画が上映されます。(詳細は八幡小隊・Tel 093-652-1584へお問い合わせください)

〈フィジー〉ファミリー ケア センターで女性と子どもを保護

1年間日本の救世軍の女性の働きで集められた「1円献金」の支援先、「ファミリー ケア センター」では、今年1~6月の間に10人の女性(街頭生活から5人、暴力被害から4人、人身取引被害者1人)とその子どもたちを支援しました。子どもたちは、適切な教育支援にもつなげられています。



救世軍とは? What is The Salvation Army?

心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界131の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師であったウィリアム・ブースによって始められ、家のない人々、仕事に就けない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や顧みられない子どもたち、災害に遭った人々などに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本での働きは、1895(明治28)年に始まり、伝道の拠点である小隊(教会にあたる)を開設。廃娼運動、失業者対策、病院や結核療養所の設立、児童や女性の保護、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて、様々な働きを興してきました。日本人で最初に救世軍士官(伝道者)となったのは、山室軍平です。キリスト教界だけでなく、社会福祉の分野における先駆者の一人にも数えられています。

ブリティッシュスタイルのプラスバンド ウェリントン・シタデル・バンド

2019 来日ツアー (11月30日~12月9日) 仙台・北海道・東京

わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。(イエスの言葉・ヨハネによる福音書8章12節)

日本の皆様にお会いする時、私たちを通してイエス様の愛が輝くことができますように、と祈っています。

ウェリントン・シタデル・バンド 楽長 ジム・ダウニー

ツアー日程の詳細は、救世軍本営伝道事業部にお問い合わせください

発行日 福音版・毎月一日発行
広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

定価 福音版・一部 四〇円
広報版・一部 一〇〇円
クリスマス特集号(十二月一日号) 一部 一〇〇円
振替・〇〇一八〇五四〇〇

発行兼印刷人 救世軍 代表者ケネス・メイナード
編集人 寺澤 真由子
〒101-0051 東京都千代田区 神田神保町一七
電話 東京 03-3337-0881
発行所 救世軍本営
印刷所 ビーアンドエス

(取扱支部) 救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではお取り扱いしません。これらの問題ではお取り扱いせず、右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価

聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会

主の栄光を語り伝えよう

あかし
信仰の体験談・証言のページ

2019 Declare His Glory



「ある男」の家族4世代の集い(於 西札幌教会 2017年8月)

『ある男の遍歴』(いのちのことば社)は、イエス・キリストを救い主と信じた男に働いた、神の力強い導きを証しする書です。今回は、その最終章としての証言をお届けします。

「ある男の遍歴」反キリスト者として七転八倒した日々……

二〇一九年四月二十一日イースターの早朝、ある男が大きく息を吸った。居合わせた家族は顔を見合わせた。検温をするためナースが入室。「今日は素晴らしい朝焼けよ!」「ある男」が神の招きに与った瞬間だった。それは厳かで温かく、家族はその「時」を感動と喜びをもって受け止めた。男が、その百年の命を見事に生ききつたからである。

時は、一九七六年に戻る。キリスト教出版社の「ある男の遍歴」と題する長編実話が出版された。それは、同社が発行する月刊誌『百万人の福音』に二年間連載されたものを一冊にしたものであった。そこには「ある男」の、人にはあまり知られたいくない、話したいくない過去の出来事が赤裸々に書かれている。それは、激しい反キリスト者だった一人の男がキリストの福音に触れ、クリスチャンとなるいきさつの記録である。同時に、二十五年にわたる夫婦間の思想と信仰に根をもつ軋轢(けんりく)が神の愛によって和解に至る、クリスチャンである妻の祈りの証言でもある。

男は、青年時代、新国家建設の希望に燃えて満州に渡った。しかし、敗戦と共に夢破れ帰国。面識のないままに結婚した妻はクリスチャンだった。

北海道の田舎町で引き揚げ者としての生活が始まった。行商しながら共産党に入党。地元で町議を二期務めるも、党の武闘路線に反発し離脱。その後、札幌に移り、事業に専念する。

しかし、そこで味わったのは、借金・破産の連続という苦杯であった。一方妻は、どんな状況でも愚痴を言うことも、動揺することもなかった。

男は、自分に対する寄り添いを妻から感じ取ること

男は、度重なる試練に打ちのめされた。光がまったく見えず、これから先いたいどうなるのか……と。そんな失意のどん底にいた時のことである。雪の降る夜、風呂敷包みを背負った人が火災見舞いに、と訪ねてきた。救世軍の北海道の責任者、救世軍士官(伝道者)の伊藤国義だった。

男は、キリスト教の人だから、妻に用事だと思ったが、伊藤は、男に会いに来たと言った。届けられたのは「社会鍋」の資金による一枚の毛布と、初めて感じたキリストの愛であった。

以来、男は、伊藤国義・千代子夫妻の姿に真実の夫婦愛を知った。キリスト教に目覚め、札幌北光教会にて求道し、キリスト者として生きるべく受洗に至った。男五十歳のことだった。

「神に喜ばれる商売」から、神に喜ばれる人生を届ける牧師へ……

焼け跡から再び商売をし、伊藤先生の教訓「神に喜ばれる商売をするように」を会社経営の基本精神として忠実に守ったところ、会社は豊かに祝福された。

やがて『ある男の遍歴』が出版され、以来全国各地で信仰の証言をしてほしい

「神の恵みは千代に」父・立石賢治の人生を通して立石貴美子

信仰の道、それは、神の栄光が現される道です。この「ある男」は、私の父、立石賢治です。神の不思議な導きは、父のみならず、私と夫にも及びました。キリストの香りを届けてくださった伊藤夫妻の送別集会が私の実家であり、私と夫も出席しました。その末席で、「まず神の国と神の義とを求めなさい」(マタイによる福音書6章33節・口語訳聖書)という聖書の言葉が私の夫の心に入り、救世軍札幌小隊(教会にあたる)に出席するようになったのでした。夫は初めて小隊に行ったその場で回心の祈りをし、キリストによる新しい命によって生かされた。

かつて教会に火をつけようとして考えた者が、信仰に生きる者と変えられた。そして、イエスの復活を祝う朝、家族に見守られ、天国に凱旋したのだった。

「死してなお、残すものあり。」現役を退き、少し気を抜いていた私の魂に、新たに神の力が注がれ、宣教の業へ派遣されているように感じています。

(立石貴美子・救世軍士官)

私の近くの救世軍を紹介してください。
キリスト教についても知りたいです。
『ときのことえ』の購読を申し込みます。

ご氏名 _____
 ご住所 _____

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。



100歳の敬老祝い。指方牧師より祝福を祈っていた。

教会を建て、伝道の拠点をもつことへと導かれる。順調だった事業をたたみ、献身の決意で農村伝道神学校に学ぶため二人で上京した。六十歳秋のことだった。

新たな出発は幸せこの上ない夫婦の姿となった。しかし、妻は、年明けに風邪をこじらせ、それまでの疲労も重なったのか、大病院の治療もむなしく、二月に召天。「夢であるならば」と思う出来事であった。失意の中、男は妻の骨箱を下げて、札幌に帰った。多くの人々は、学校にはもう戻らないだろうと思っていたが、妻と誓った献身を貫くため男は学校に戻った。心労と体力の限界を抱えての勉学の日々であった。

「先に一人息子を失い、今また妻を失い、人間の生涯は涙の谷間を歩いているようなものと言われるが、夜半の涙は枯れ果てることはない」

「このような中ですべてを主にゆだねつつ、『光栄あるイエス・キリストの証人として福音宣教に歩むことができるように』とただそれのみ祈りつつ学んだ」と後日、男は書いています。

三年の学びを終え、伝道師として一年間、月寒教会で奉仕した。伝道者生活の

始まりであった。牧師の試験に受かり、自宅に「西札幌教会」の看板を掲げた。開拓伝道の開始である。信徒は誰もいない。苦闘の日々が始まる。涙あり、笑いありの開拓伝道奮闘記が続く。教会の標語が掲げられた。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」(ローマ人への手紙12章15節・口語訳聖書)

「恐れるな。語りつづけてよ。この町には、わたしの民が大ぜいいる」(使徒行伝18章9、10節・口語訳聖書)

御言葉が前に後ろに力となって男を支えた。

やがて自宅の建物は古くなり、新会堂建築の必要が出てきた。男はその時七十七歳。周囲からは年齢、体力からみて心配や懸念の声も多かったが、教会員一致の祈りが献げられ、多くの支援者によって献堂するに至った。堅固な土台を据えた後、男は、更なる熱心をもって教派を超え、国を超え、海外へと足を運んだ。

その後、自伝統編『ネグエブの川』を一九九四年に出版。前書からの十八年間は、信仰の戦いもあった。その書き出しに、

「ある男は七十五歳になりました。いつの間にか……こんなに歳をとって……わが

ことながら驚いています。それほど私は自分の人生を無我夢中で過ごしてきました。この間『ある男』は、ただ一筋にキリストへの道を全力疾走いたしました。この地(札幌)で開拓伝道を始め十年、『ある男』はもって生まれた性分ともうしましうか。猪突猛進、壁に当たってはじめてそこに壁があったことに気がつくように、相も変わらず挫折を繰り返しながら今後さらににもっと激しく走り続けたい、それは一途に福音が広がることを願うからです。『主よ、どうか、われらの繁栄を、ネグエブの川のように回復してください。』(詩篇126篇4節・口語訳聖書)

そのような思いで福音が北の果ての隅々まで伝わることを夢に描き、神が実りの秋を迎えさせてくださると確信し、キリストの鐘を鳴らし続けています。

本書はキリストに命を懸